



赤中をさらに進化・発展させるために…

2月6日(木)に、学校運営協議会を開催いたしました。学校運営協議会とは、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に定められた組織で、学校運営への必要な支援に関して協議する機関です。保護者、地域住民の皆様などの学校運営への参画や支援・協力を促進することに向けた協議を行い、学校と保護者、地域住民などとの信頼関係を深め、学校運営の改善や生徒の健全育成に取り組むために開催しています。今回は、主に赤中生の「学力を高めるために必要なこと」を中心に協議していただきました。内容を一部紹介いたします。

- ・**学力向上のためには、より一層小学校と中学校の間での連携が必要である。**
⇒小中学校のみならず幼児施設も一人の人間を育てている意識を持ち、家庭学習など保護者の方にも協力していただく必要がある。
⇒課題を明確にして具体的な対策を講じ、小中と持ち越すことがないようにする。
- ・**学ぶ生徒と指導する教員が、学力向上に向けた課題を共通理解する必要がある。**
⇒「授業の責任は、教師と生徒が半分半分である」ことを双方理解し、学力向上に対する意識を高めていく必要がある。
⇒教師の省察のみでなく、生徒にもアンケートなどを取って実態を把握していく。
- ・**授業の中で生徒の関心・興味を引き出し、意欲を持って取り組ませる必要がある。**
⇒一時間、一時間の授業の価値を高めていく努力が必要である。
⇒前時の授業において次時の学習に向けた予告を行い、教師が懸命に教材研究をして準備をすることで魅力を高めていく。
- ・**アンケートにおける生徒の授業に対する手ごたえと実態の相違を埋める必要がある。**
⇒アンケートを平均値で見ていると改善策を見つけにくいので、対象とする生徒に焦点をあてどのような成果があるかを確認する必要がある。
⇒生徒の学力が伸びた要因は何かを知ることが、改善の方策を考える一つになる。
- ・**授業で使用している教材などが適切であるかを、確認したり見直したりしていく必要がある。**
⇒学習課題も含めて、赤中生の実態に合った教材で指導していく必要がある。
⇒教員が、教材研究の段階で見極めていくと同時に、学校として教材の価値を高めていくことを検討していく。

【その他の意見】

- ・小学校が休校となる中川地区との連結を密にして、よい地域づくりをしていきたい。
- ・子どもの育ちをしっかりと把握して、気持ちに瞬時に目を向けられる見取りができるようにしていきたい。
- ・地域での様々な活躍に感激している。さらに応援していける環境をつくっていきたい。
- ・生徒から元気を感じる。元気がなければどんな物事も始まらない。

「たとえ左耳が聞こえなくても私はかわいそうなんかじゃない。」左耳に難聴を抱えながらも前に向き続ける姉は私の誇りだ。私の姉は三年前、突然左耳に突発性難聴を患い、左耳が聞こえなくなった。急に入院することが決まり、何があったのか理解できないまま姉は入院してしまった。入院生活はとても大変だったと思う。急に左耳が聞こえなくなった違和感、気持ち悪さ、止まらない耳鳴り、耳鳴りを止めるための薬の副作用…。その影響で夜も眠れず弱っていく姉に、コロナ禍で面会ができず、ビデオ通話でしか励ませないことがとても苦しかった。急に障がいを抱えることになり、それを受け入れて、一生その耳と向き合っていかなければならないということが姉にとってどれ程辛いことだったか図り知れない。それでも治療をやめずに続けた姉を、私は素直にすごいと思うと同時に尊敬している。

私には悔やんでも悔やみきれない出来事がある。入院生活が終わり、しばらくしたある日、私は姉とケンカをした。ケンカをした理由は小さな事だったが、イライラしてついひどい言葉を投げつけてしまった。「耳が聞こえないくせにうるさい！」しまった！と思い、姉の顔を恐る恐る見てみると、ひどく悲しそうな顔をして静かに泣いていた。そして、そのまま何も言わず二階へ上がって行った。すぐに追って謝り、なんとか許してもらえたが、姉の辛そうな姿を一番近くで見てきた、この私が、ひどい言葉を吐き傷つけてしまったことを申し訳なく思う。今でもあの時の姉の顔が頭から離れない。けれど、姉は、そんな時でも私を責めなかった。それが余計に姉の心の傷の深さを表しているように感じ、苦しかった。

ある日、家族皆で食卓を囲んで夕飯を食べている時、学校の話になった。その時姉が二つの事について訴えてきた。「耳の障がいは目に見えない分、自分がどんな状況で、どういう配慮が必要なのかを説明しても理解してもらいにくい。私の場合は補聴器をつけていないから、より理解してもらえない。他に『可哀想。』って言われるのがすごく嫌だ。たとえ左耳が聞こえなくても私は『可哀想』なんかじゃない。」インターネットの情報によると、耳の障がいは目に見えにくい障がいの一つと言われているそうだ。姉は補聴器をつけても、あまり聴力が変わらないため、つけておらず、初対面の人からは耳に異常があるとは気づかれない。一回一回左耳の状況を説明しなければならなかったり、「本当に聞こえないの？」と疑われたりと苦労することも多いそうだ。中学校時代は小学校の頃から一緒だった友達がほとんどで、自分の事を理解してくれるという安心感があったが、高校という新たな場所では姉を知っている人はほとんどおらず、自分の持っている障がいについて話さないと理解してもらえない。勇気を出して耳の事について話してみても、戸惑ったような表情で見られたり、「可哀想。」と言われることもあったりしたそうだ。だが、姉は、「難聴になったからこそ成長できた所がたくさんある。確かに辛いことはたくさんあったけれど、それを乗り越え、人として成長できた。だから私は、全然『可哀想』なんかじゃない。」と語る。姉にとって、その左耳は、きっと何も恥じることのない自分だけの「個性」なのだろう。姉は私の姿を見たり、話を聞いたりする中で、障がいがあることに「可哀想」と同情するのではなく、その人自身を認め、自分に何ができるかのかを考えることが大切だと思った。どうすればその人が過ごしやすいのか、どのような配慮が必要なのかを考え、皆で支え合って生活していけるような世の中になればいいと思う。

障がいがあるうがなかるうが、全ての人が幸せに生きる権利がある。その事を忘れずに優しい心を常に持ち続けて生きていきたいし、困っている人がいれば誰にでも手を差し伸べられるような人になりたい。そのために、たくさんの本を読み心を豊かにしたり、苦手意識のあることにも積極的に挑戦したりして視野を広げていきたい。「陽奈乃なら大丈夫。」辛い時に私を励ます、その言葉は、無限大の勇気をくれる。それは姉が、どんなに大きく厚い壁も乗り越え、強さや優しさに変えてきた人だからだ。私もいつか誰かに勇気を与え、たくさん笑顔の花を咲かせたい。それには、勉強や部活動などでの毎日の努力が必要不可欠だ。そのことを忘れずに将来の自分自身が描く理想の姿へ向かって、今を大切に一步一步着実に歩いていきたい。